

1. 定義と概念の問題

「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる知と諸技法」を指すが、そうした理想や理念とは裏腹に、それが「霊的暴力」（超越的な世界観に裏付けられた破壊性ないし破壊行為）を引き起こすことがしばしばある。オウム真理教事件は、そうした「身心変容技法」による諸修行がもたらした「霊的暴力」の発露した典型的な事件と捉えることができる。

「霊的暴力 (spiritual violence)」とは、宗教的暴力の中でも、「目に見えない霊的 (spiritual) なモノ」の存在 (spiritual being) や力 (spiritual power) による、さまざまなレベルでの圧迫や抑圧や破壊を指す。「目に見えないモノ」の力を使って (たとえそれが幻想やイリュージョンや共同幻想であっても)、自他を傷つけ、壊し、支配する事態の出来である。古来、「呪い・呪詛・呪殺」などはそうした「霊的暴力」の最たるものであった。奈良時代以降、たびたび「呪い (呪詛)」が禁止され、犯罪として取締りを受けたり、「呪いをかけた」という疑いをかけられて無実の罪で処刑された例もあるのは、古代からその「負の力」が恐れられていたからである。

こうした広義での「霊的暴力」の中で、意図的か非意図的かに関わらず、ある人物や集団に対して繰り返し破壊的行為を行なう場合を「霊的虐待 (spiritual abuse)」と規定し、また霊的な世界観や力を背景にして悪質な嫌がらせをすることを「霊的ハラスメント (spiritual harassment)」と規定しておく。

2. 近代における「霊的暴力」を自覚した思想家

近代において、こうした「霊的暴力」の問題性をいち早く自覚し洞察した思想家がニーチェ (1844 - 1900) と鈴木大拙 (1870 - 1966) である。ニーチェはそれを「ルサンチマン」とそこからの解放として問題視し、鈴木大拙は「魔王礼讃」(『霊性的日本の建設』1946 年) の中で「霊性的自覚」の対極にある「魔王」の振る舞いとして考察した。ニーチェは「ルサンチマン」の解放者の先駆モデルとして、「負の感情処理者」としてのゴータマ・シッダルタを、『曙光』(1881 年) や『この人を見よ』(1887 年) の中で、「^{ルサンチマン}怨恨感情」を解放する「あの深い生理学者仏陀」とか「自己救済の宗教の師、ブッダ」と称え、仏教を「精神の衛生学」(Hygiene) とか「生理学」と呼んでいる。< 怨恨感情は病人にとっては絶対の禁物であり、もっぱら病人の悪なのだが、困ったことに、病人というものはえてしてこういう状態に陥りやすいのだ。——このことをよく知っていたのはあの深い生理学者^{ブッダ}仏陀であった。仏陀の「宗教」、これはキリスト教のようなあんな哀れむべきものと混同されないためには、宗教などと呼ばないで衛生学と呼んだ方がいいと思うが、とにかく仏陀の「宗教」は、布教のてがかりを^{ルサンチマン}怨恨感情の克服という点に置いている。つまり、魂を怨恨感情から解脱させること——これが快癒への第一歩なのだ。「敵意によって敵意がやむことはない。友愛によって敵意はやむ。」という言葉が仏陀の説法の劈頭にある——だが、こんな言い方をするのは決して道徳ではない。こんな言い方をするのは、それは生理学だ。——^{ルサンチマン}怨恨感情が、弱さから生まれている場合には、それは他の誰によりもその弱い人自身に一番有害である> (川原栄峰訳)。ニーチェが指摘したような、「^{ルサンチマン}怨恨感情」という負の感情を解放浄化する身心変容の「生理学」や「衛生学」は今も必要であろう。昨今の「マインドフルネス瞑想」の流布はそうした方向に進んでいる一つの表れと見ることもできるが、同時に瞑想過程で起ってくるさまざまな負の事態にも注意しなければならない。

鈴木大拙は『霊性的日本の建設』(初版 1946 年、『鈴木大拙全集第 9 巻、岩波書店』) の冒頭の「^{ラウス・ベリ}戦争礼讃 Laus belli (魔王の宣言)」の中で、「魔王」の特性を、①力、②無意識、③狂信、④うそ、⑤恨みとし、「魔王」はそれらの中に忍び込み、発動する、と強調した。鈴木大拙によれば、「魔王」は「力」を以て人間を支配し、ほしいままにする。まず何よりも、「魔王」は「力」とずるがしこい策略によって、人や物を支配し屈伏させ服従させていく。それはさまざまな「権力」や「武力」や「暴力」に関与する。そこでは、「魔王」はあらゆる侵略的な権力や暴力の源泉として、戯画的に描かれている。そして、「魔王」はこの「力」をさまざまな形で駆使して、人間の「無意識」を動かし、「性」や「狂気・狂信」や「うそ」にはたらきかけると指摘する。

とすれば、麻原彰晃は鈴木大拙の言う「魔王」的特性を正確に体現していると言えるだろう。「グルのクローン化」

などはもともと「魔王」的発言・発動であろう。仏教は本来「不殺生」^{アヒンサー}（非暴力）を戒律の第一に掲げていたにも関わらず、なぜ「オウム真理教事件」のような殺人事件が起こったのか？ それを制御できる思想も制度も機能もなかった、あるいは弱かったということになる。その問題を考える視点として、「審神者」^{きんわ}と「シンクロ能力」を取り上げる。

3. 霊的暴力の事例検討～第一次大本事件とオウム真理教事件が問いかける問題点

オウム真理教事件などに現れた「霊的暴力」を考えていく際に、「鎮魂帰神」という大本の神道霊学的行法が孕む問題点は参考になる。それはさまざまな神懸りの現象を誘発し、そこから不敬罪という第一次大本事件(大正10年, 1921)の起訴容疑をも生み出した。そもそも鎮魂帰神は、本田親徳や長澤雄盾らに始まる、神懸り(帰神)する「神主」とそれを目撃・制御・対面・対話・査定する「審神者」^{きんわ}が対座して行なう憑霊の身心変容技法であった。その憑霊現象において、「我は**大神であるぞよ。……せよ」などという「託宣」ないしメッセージが発せられることがある。そこでの最も深刻な問題点は、その発話の真偽や懸かってくる神々の神格の特定などが適切に行われるかどうか、言い換えると、そこで起こる神懸りや託宣などの身心変容を「審神者」がどう制御・査定できるかである。もしその際に制御不可能な状態が発生すれば、それが自我のインフレーションや自己肥大幻想の拡大という深刻な事態が発生する。ニーチェの言説を敷衍するなら「ルサンチマンの屈折拡大」が表出される事態が発生する。大本の場合、第一次大本事件が起こることによってこの危険性が曖昧にされ、「審神者」の質の担保や規準の問題が残された。大本を出て神道天行居を開いた友清歆真や後に日本心霊科学協会を設立した浅野和三郎は、そのような問題点を自覚しつつ、その問題意識を霊学ないし心霊科学として引き継ぎ展開したが、それもまた未完である。

一般化して言えば、ここには、密教や諸神秘主義が目指す「三密加持」や「天人合一」などの神秘的合一思想が共通して内在させている問題点や危険性がある。オウム真理教教祖麻原彰晃が「最終解脱者」であるという査定(審神)がどのようになされたのかも、ここに関わる。また「身心変容技法」が内蔵するシンクロ能力(合一能力)の強化と拡大が、制御不可能となる自我肥大を生み出し、自他の破壊につながることに注意が必要だ。

これまで私は『宗教と霊性』(角川選書, 1995年)、『エッジの思想』(新曜社, 2000年)、『呪殺・魔境論』(集英社, 2004年)などで、「魔境」の問題としてオウム真理教事件と麻原彰晃の問題を取り上げてきた。身心変容技法という観点からオウム真理教を見た場合、そこでの身心変容をもたらす諸修行は多くの問題を孕んでおり、教祖麻原彰晃を含め、弟子の出家者・在家者の信者修行者のさまざまな「魔境」と「偏差」(偏り・走火入魔)を生み出した。

問題の一つは、過剰に「超能力」や「神秘体験」や「イニシエーション」の獲得成就を求め、それにこだわったところから生まれてくる身心変容や修行者共同体内のアンバランスであり、とりわけ、性と慢と暴力(力による支配と殺傷行為)として顕在化した。初期の過剰な性的イメージや性器刺激は仏教修行を標榜したオウム真理教の第一の問題点(負の局面)であった。麻原彰晃はタントラ仏教やヒンドゥー教的伝統などの自己流理解と実践により、鈴木大拙の言う「魔王」の好む「性の力」を全面的に取り込み、偏差に満ちた「イニシエーション」の体系と階梯を生み出した。第二に、その内的暴力としての「性の力」の取り込みが「自我のインフレーション」や絶対支配の全能感や慢を促進し、自らを「最終解脱者」からさらに「王」や「教皇」に祀り上げて自己神格化し、その絶対支配に敵対する人々や勢力を「ポア」と称する外的暴力としての殺傷していく暴力の前景化を生み出す。つまり、「性の力」と「絶対権力」の行使が麻原彰晃の「霊的暴力」として顕在化したのである。その麻原を絶対的な権威者・権力者である「教祖・開祖・尊師」として戴く体制(教団組織・幹部組織)を諸種の「イニシエーション」を駆使し装置化して作り上げ、麻原の妄想的な思想と計画を実体化することになった。その一方で、活動初期の1986年には、「傲慢にならないために、他人に仏性・神性を認めて、学んで奉仕すべきである」「様々な生き物は、一つの生命体の中の細胞のような者で関係し合っている」「選民思想はだめだ」と述べ、「魔境」について自戒の言葉も発していたが、麻原は「傲慢・魔境」の境に深入した。

そのことは厳格なる「審神」^{きんわ}が出来ていなかったということになるが、そもそもそれはどのようにして可能なのか？ 麻原は、①正しいグルを持つ、②功德を積む、③強い信を持つ、④行の種類を少なくすると修行の指針を弟子に示していたが、「グルのコピー化・クローン化」に突き進み、「マハームドラー」を弟子たちに仕掛けて犯行に及んだのである。